The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期仏典における涅槃の基礎的研究 ー『スッタニパータ』を基本資料としてー
Author(s)	富田, 真理子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　富田真理子　）	
論文題名	初期仏典における涅槃の基礎的研究 ―『スッタニパータ』を基本資料として―

論文内容の要旨

本論は，初期の仏教経典の分析によって，仏教が究極の目的とする「涅槃」という概念を，ゴータマ・ブッダ自身が，そして初期の仏教教団がどのように考えていたかについて検証するものである．

涅槃とは何かについてはこれまでも数多くの研究がなされ成果が上げられてきたが，いまだ基本的・中核的な部分で曖昧さが残っており，さらなる解明が必要とされている．このことを踏まえて本論では，初期インド仏教文献の主要一次資料であるパーリ聖典の中でも，初期に位置づけられる経典群(経蔵五部，いわゆるニカーヤ中，後代とされるものを除く)に資料を限定し，文献学的考察により，涅槃を表すとされるパーリ語諸語彙(名詞nibbāna, nibbuti, parinibbāna，動詞nibbāti, nibbāyati，分詞nibbuta, abhinibbutattaなど；以下「涅槃の語彙」と称す)の正確な意味の把握を試みる．特に，従来から初期の経典群の中で最も成立が古い部分を含むとして重要視される『スッタニパータ』(Sn)を基本資料として用いる．その際，韻文を最古層・古層，散文を新層と区別する先行研究の成果を参考に，各層に現れる涅槃の語彙の意味や用法を分析して，各層間および語彙間にどのような涅槃観や教理の異同や展開が見られるのかを精査する．これにより，従来の初期仏典を一纏めにするアプローチでは得られなかった，涅槃観の多様性・多層性を浮き彫りにする．また，従来，原典解釈に都合よく使われることの多かった後代5世紀頃の成立とされる註釈『パラマッタ・ジョーティカー』(Pj)の解釈を，原典とは分けて分析・比較することにより，註釈文献を単なる補助資料ではなく，後代の一つの涅槃観として解釈史の中に位置づけることも試みる．

本論は4部構成である．序論と1.では，涅槃の語彙の原意に関して分析し，研究史をまとめながら問題点を整理する．2.では，実例検討により，初期仏典中の涅槃の語彙を分析する．3.では，その涅槃が生前で得られるものか，それとも解脱者・阿羅漢のいわゆる死を表すのかという，生前・命終の問題について掘り下げて再考する．その際，質問とブッダ世尊の返答の意図についても分析する．最後に4.では，解釈史の観点から，Snの註釈であるPjを中心に，註釈文献の涅槃観をまとめる．

まず1.において，涅槃の語彙の原意がnir√vā^{2}由来の「[火が]消える」であり，Snを含む古層韻文において動詞語形は√vā^1「[風が]吹く」であっても√vā^{2}の語義として使用されていたこと，但し，語形√vā^{2}で語義√vā^{1}の用例はなく，逆は見出せないことを指摘する．vātiをvāyatiの意味で用いるという混同はVedaから見られるが，本検証結果により，これがパーリ文献の特に古いテキストにも残っていることが裏付けられる．そして「消える」の意味は，そのモノや人自体の消滅ではなく，燃えているそのモノの火が消えること，または，その人の火的要素が消えることであることを確認する．

先行研究の成果においては，初期仏典を総合的に判断し註釈を加味した上で涅槃の解釈がなされることが多く，涅槃とは基本的に生前に得られる境地であり，それは煩悩の火が消えることとされる．一方で，涅槃が解脱者即ちこの世で涅槃を得た者の肉体の死(命終)を表す場合もあるともされる．このように二種の涅槃があることを前提としつつも，しばしば両者の区別が曖昧なまま論じられる場合があったり，筆者の考察では生前・命終の判断がつけられない用例が数多く存在するにも拘らず，いずれかに断定するような議論が散見される．またさらなる問題点として，厳密には語形成法の異なる涅槃の語彙が全てほぼ同義としてひとくくりに解釈される傾向があり，涅槃の語彙間の異同はあまり検討されていないことが挙げられる．

以上の問題提起を受けて，2.では初期仏典の時代的な層分けに従って，涅槃の語彙がどのような場面・文脈で，どの発言者によって，どのような意味・意図で用いられているかなどを文献学的に精査する．基本資料Snに関しては全用例を検討し，関連する古層・散文経典を適宜取り上げる．加えて，管見の限り，これまで詳細に取り上げられることのなかったnibbuti，さらにはabhinibbutaを伴う複合語に関して，初期仏典中の全用例を調査する．

その結果，nibbānaは最古層文献のSn 1094において，「何も所有しないこと」「取り込まないこと」また「更なる(=より良い)渡り先(避難所)を持たない島」そして「老いと死の滅尽」であると定義される．さらにSn 1109では「渇愛

の捨離によってnibbānaと言われる」(具格)と言われ，渇愛等の煩悩の滅がnibbānaの中核的要素として理解され得る．これは散文『サンユッタニカーヤ』(SN) IV pp. 251, 261において，涅槃が述語名詞構文によって煩悩の滅そのものであると言われることの類似表現である．これらは従来より生前の涅槃を表す根拠として解釈されてきたが，渇愛の捨離，つまり煩悩の滅の時点とnibbānaの時点とが必ずしも同一である必然性は無く，涅槃の時点を生前と断言できないことが確認される．同様に，涅槃の語彙を伴う複合語や「涅槃へと至った」等の表現においては(例: Sn 514: parinibbānagato)，直接定動詞や過去分詞によって「涅槃する・した」と言う場合と異なり，その文脈が生前のことを表すということが，必ずしもnibbāna自体の時点が生前であることを意味するものではないと判断される．例えば，「nibbānaへと至った」との表現は，実際に[生前に] nibbānaに至ったとも，あるいは[命終時に至る・得る] nibbānaに生前に至った，つまりnibbānaに至る権利・資格を生前に得た，それが約束された，との意味に捉えられる余地をも残すのである．このように，nibbānaを語る文脈が現世・生前であることと，nibbāna自体の時点が現世・生前であることとは分けて考えなければならないが，従来の研究では，この点が考慮されてきたとは言い難い．

nibbānaの一定義である「老いと死の滅尽」(Sn 1094)は，輪廻・再生を止めることに他ならないが，それが(1)命終の後，つまり次生(以降)のことだけなのか，あるいは(2)今生でのことも含むのかは分からない．(2)の場合，今世での老死や死・再生の滅尽は，それらに影響されない=それらを超越する等の意味に解されよう．nibbānaの時点はこれらの違いに応じて(1)であれば命終となり(例: Th 907)，(2)であれば生前と判断され得る．文脈から(2)と判断される用例も見出せる(例: 最古層Sn 1095，古層Sn 235; 359; 638,『マッジマニカーヤ』(MN) I p. 187偈文)．

最古層でnibbānaの一定義である「取り込まないこと」を表すā√dā (動詞または派生語)の否定形が，古層においてnibbutaと共に現れ(例: Sn 630; 638)，涅槃していることを示す用例が現れる．これは煩悩等の取り込み(取著)がない状態を示唆する．さらに，理解力(paññā)・理解する(√jñā)ことと涅槃することの間には密接な関係が窺え，時代が進むにつれて次第により明確に文献に示されるようになった可能性が指摘される(例: Sn 186; 359; 737; 739; 765等)．加えて散文では，自身の命終後のことを理解するとの文脈で涅槃の語彙が現れるようになり(例: MN III pp. 244 – 245)，そして，命尽きることを表すために特にpariを付した「[般]涅槃する」が，古層の後期・新層の散文の時代から採用され，更には，この用法を特に高揚した「大般涅槃経」が初期仏典以降に大きく影響を及ぼし，解脱者の「命終」そのものが真の涅槃・[般]涅槃であるとして広く認識されるようになっていったと推察される．涅槃の語彙間にも意味内容に若干の異同が認められる．nibbutiは最古層でsanti「鎮まり」と定義され(Sn 933)，自己の内面の鎮まりを表し，間接的に涅槃が示唆されるが，古層・散文のほぼ全用例においては，より明確に涅槃している者であることが導かれる．nibbutaの諸用例は，nir√vā²の過去分詞の役割を果たしていることが支持され，大半が現世・生前の文脈である点において，時点の判別がつかないnibbānaおよび明確に命終を表す一部のpari付きのnibbutaとは対照的である．馬と鳥の例もあり，人の場合も内面の火的要素が消えた清涼さや穏やかさを表すだけで，涅槃しているかどうか判断できない用例も若干見出せる(例: 最古層Sn 783，古層Sn 707等)．初期仏典におけるabhinibbutattaおよびdiṭṭhadhammaが付された複合語の全用例が，最古層および古層にのみ見られ，古い用法であることが認められる．「現世」を強調する後者の複合語の使用は，古くから真の涅槃は命終であるとの思想背景が広く世間にあったことを窺わせ，ゴータマ・ブッダは生きている間に涅槃し得ることを強調する意図があったと推論される．

以上のような涅槃の語彙の考察結果から，おおむね時代層の仮説は合理的に説明され得ることが導かれ，その中で広範囲の時代に跨る古層は，前期と後期にさらに分けられる可能性を指摘し，さらに散文経典では，涅槃の教理や用法の多様化が見られることから，思想の展開が窺え，初期仏典における涅槃観の多様性・多層性が確認される．

次に3.では，最古層より人々の関心は命終後にあったことを示した上で，涅槃の時点の判別がつかない用例が多く見出せることに対応して，時に質問者の意図と世尊の真意が完全に一致していたわけではなかったとの一解釈を提示することで，世尊が説いた涅槃の教説は，そもそも生前・命終という時点を意識していなかった可能性を示す．

本論を通して原典と註釈を分けて分析・比較することにより，それらの間の理解の相違を明らかにする中，最後に4.において，註釈文献の涅槃観をまとめる．註釈文献は，火が消える場合を除き，涅槃の語彙を全て「涅槃」と解釈し，生前・命終で区別する二種涅槃[界]の教理を前提とする．その上で，生前の涅槃を煩悩の滅あるいは燃料の残余のある(有余依)涅槃[界]と説明する一方，命終の涅槃は，蘊(心身の構成要素)，最後の認識機能の滅，燃料の残余のない(無余依)涅槃[界]等と説明しており，全般的に整備された教理体系に従った解釈であることを示す．

本研究によって，初期仏典に示されたブッダ世尊の涅槃観と当時の一般的思想背景，涅槃の語彙間の異同，および涅槃観の多層性・多様性や展開に関し，従来見過ごされてきた視点や問題点を明らかにするとともに，大小の幾つかの新たな知見を提示した．これにより，涅槃の概念の曖昧さの解消に少しでも寄与できたことを願う．その一方で，仏教の重要概念である涅槃の全容解明のためには，さらに他のパーリ聖典，他部派，および仏教以外の諸文献を視野に入れ，類似概念との関係性を含め，包括的な語彙収集とそれに基づく緻密な検証が今後必要となろう．

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　富田真理子　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　准教授　堂山 英次郎 副 査　大阪大学　教授　榎本 文雄 副 査　大阪大学　教授　湯淺 邦弘

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：初期仏典における涅槃の基礎的研究
—『スッタニパータ』を基本資料として —

学位申請者　富田 真理子

論文審査担当者

主査　大阪大学准教授　堂山 英次郎
副査　大阪大学教授　榎本 文雄
副査　大阪大学教授　湯淺 邦弘

【論文内容の要旨】

仏教が究極の目的とする「涅槃」は，仏教の最重要かつ基本概念の一つでありながら，未だ解明されたとは言い難い。本論文はこの涅槃について，そもそもゴータマ・ブッダ自身が，そして初期教団がどのように考えていたのかという根本的な問いに端を発する。これを探求するための基礎研究として本論文は，初期インド仏教の主要一次資料たるパーリ聖典，特に最古層を含む『スッタニパータ』（Sn）を中心とする初期経典を用いて涅槃に関する諸語彙を詳細に検討し，従来の研究に無い新たな視点や文献の時代区分を導入しつつ，涅槃や涅槃観の多様性・多層性を提示することを試みる。

本論文は，序論，４部構成の本論，結論，及び種々の付録からなる。序論では，本研究の方法論，対象範囲，主要経典の成立や時代層の問題に触れた後，涅槃研究における複数の問題点を提示するとともに，論文全体の概要が示される。ここでは，先行研究を参考に主要経典を最古層，古層，新層＝散文に分けて分析することが作業仮説として立てられる。本論第 1 部では，動詞 nir-vā の定動詞形や nibbāna, nibbuta, nibbuti といった名詞など涅槃を表す諸語彙（以下，涅槃の語彙）の語源と原意を分析するとともに，それらの研究史を詳細に紹介する。本論の中核となる第 2 部では，初期仏典中の涅槃の語彙の用例を上記の 3 つの時代層に分けた上で，涅槃の各語彙ごとに検討を加えている。その際，前後の文脈や発話者の意図など，可能な限り多面的な視点から各語彙の含意や他の類似語彙・概念との関係を分析し，全ての用例について明確に分かることとそうでないこととを峻別して提示する。その結果として，各語彙の用法・含意に差が見られることや，それらが時代層の違いによっても異なることが指摘される。語義の考察の多くの部分は，従来の研究にもあるように，涅槃とは生前で得られるものか，それともいわゆる死（命終）において得られるものか，という涅槃の時点の問題に費やされている。その中で富田氏は，文脈が生前であることと涅槃自体の時点とは分けて考えるべきことを，先行研究に欠けていた視点として繰り返し主張する。第 3 部ではこの議論を通時的視点から整理し直し，最古層の時代から人々の関心は生死・輪廻や命終後にあるのに対し，世尊が説いた涅槃はそもそも生前・命終の時点を意識していなかった，と結論付ける。第 4 部では，Sn の註釈である『パラマッタ・ジョーティカー』が涅槃の語彙を，後の整備された教理体系に基づいて理解していることを明らかにする。結論では，以上の考察結果をまとめ直して提示する。最後に Sn 及び「大般涅槃経」における涅槃の語彙の用例・用法の表，各用例の訳注，その注釈等が資料として付されている。

【論文審査の結果の要旨】

涅槃は，仏教では一般に悟りや解脱と似た究極の境地を意味するが，それが仏典の中で厳密にどのような概念であるのかについては未だ不明瞭な部分が多い。問題の複雑さや先行研究の多さなどから，こうした仏教の基本概念の研究を避ける研究者も多い中，本論文はこれを敢えて正面から取り上げ，従来の研究の問題点を指摘しつつ，可能な限りの文献学的理解とそこから導かれる知見を理性的に提示した点で，意義深い研究と言える。

本論第 1 部には，涅槃の語彙の語源と原意が分かりやすくまとめられている。特に nibbāna の動詞語根が，未だに間違って理解される同音異義の √vā[1]「[風が] 吹く」ではなく，√vā[2]「消える」であることを明示した上で，前者の語形が二次的に後者の意味でも用いられ，そしてそれが実はヴェーダ語から引き継がれた古い現象であるとの指摘は注目に値する。続く研究史は 19 世紀から現代に至るまでの研究史を西洋・日本に分けて丁寧に追っており，涅槃の研究史の貴重な資料であるとともに，本論での議論に入るための導入をなしている。

本論の中核をなす，『スッタニパータ』（Sn）を中心とする初期経典における涅槃の語彙の実例検討（本論第 2 部）は，文献学的に正当な方法論に則っている。例えば，動詞 nir-√vā の定動詞形と nibbāna，または nibbuta と nibbuti という同語根の語彙を安易に同等に扱わず，一語形一語義の原則から，各語彙の意味を文脈や発言者の意図など用例箇所の徹底した読解に基づいて浮かび上がらせてゆく手法は，本研究の質を保証するものである。涅槃の語彙を考察する際に富田氏が特に重点を置くのは，涅槃が生前で得られるものか，それとも（解脱者・阿羅漢が）いわゆる肉体的な死（命終）を迎える時に達成されるのか，という問題である。先行研究が涅槃の語彙の各用例を生前・命終のいずれかに判断するのに対し，富田氏は多くの場合結論が出せないと主張する。更には，人が生前に「nibbāna へ至った」と言う場合であっても，実際に生前に涅槃の状態に至った，あるいは命終時に涅槃に至る権利・資格を生前に得た，という両方の解釈が可能という。この視点は従来の研究では見過ごされてきた点であり，これが涅槃の全体像に与える影響は極めて大きい。実際に富田氏は，涅槃の時点が決められない用例が多いことから，初期仏典において涅槃が語られる場合，ブッダ世尊をはじめ説法者はその時点を意識せずに語っていた可能性が高いと結論付ける。この見解は更なる検証を必要とするものの，従来の涅槃研究に大きな見直しを迫るものである。その一例として本論第 3 部では，質問者とブッダ世尊の回答が対応しないように見える用例は，当時の人々の関心が死や死後に向けられているのに対して，世尊が生前・命終を意識せずに涅槃を説いたことに起因するとする。富田氏は，Sn の註釈『パラマッタジョーティカー』（Pj）の位置づけについても，幾つかの重要な指摘をしている（本論第 4 部）。特に Pj を経典の補助資料ではなく，一つの思想，一つの涅槃観として Sn とは完全に分けて研究する姿勢は，今後の註釈研究の進むべき方向性と示すと思われる。付録の用例リストはいずれも見やすく，また用例検討はパーリ語文献読解の高い水準を満たすともに，適切に二次文献を扱える能力を示す。

しかし一方で，改善すべき点も見られる。丁寧な説明を心がけるあまり文章が冗長になり，かえって論理が見え難くなる部分や，また全体的には慎重な議論を心がける一方で，論理に若干の飛躍がある部分も見られる。特に時代層と語彙の別による用例検討では，限られたデータから個々の結論を導くことについてもう少し慎重さが欲しい。なお，作業仮説である時代層による初期仏典の区分が有効かどうかは，今後更に検証される必要がある。その他，若干の「涅槃は…である」という文を「涅槃の定義」と見なすことや，同格に置かれた名詞を同一事象の表現と見なすことの危険性も，もう少し認識すべきであろう。詳細な研究史と本論文の結論との関係付けも欲しかった。

とはいえ，これら諸点は本論文の価値を大きく損なうものではなく，本論文が初期仏教における涅槃の理解に対してなした貢献は否定し得ない。よって，本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。